

2020.7
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やま 富 薬

7号

第42巻
No.372



ノウゼンカズラ *Campsis grandiflora* K. Schumann (ノウゼンカズラ科 *Bignoniaceae*)



生薬 リョウショウカ（凌霄花）

生薬 リョウショウカ（凌霄花） 夏、開花したものを採取し陽乾する。

成分 イリドイド配糖体：campenoside, 5-hydroxycampenoside, cachinoside I, tecomoside、フェノール誘導体：acetoside, campneoside I, II、アルカロイド：boschniakine など。

効能 利尿、通経薬として月経不順、産後の出血、打撲症に用いる。凌霄花散などの処方に配合される。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



中国中南部各地に広く自生または植栽され、中国においては古くから知られていたようで『爾雅』(BC200頃)に「菝、凌菝。一名凌時」と記され、『神農本草経』(2C-3C)に「紫葳、味は酸、微寒。川谷に生ず。婦人乳余疾(産後の疾患)、崩中(不正性器出血)、癥瘕(腹内の腫瘤)、血閉(無月経)、寒熱羸瘦を治す。胎を養う」と主に婦人病の薬効が記されています。また、『名医別録』(502-536)にも「紫葳、毒無し。茎葉、味苦し、毒無し。痿蹶(手足が萎えて力が入らず冷える)を主る。気を益す。一名凌菝、一名茱萸。西海川谷及び山陽に生ず」とも記されています。これら漢名について李時珍(1518-1593)は「俗に赤い艶やかなるを紫葳という。葳とはこの花が赤く艶やかだから名つけたものだ。

木に附着して上に伸び、高さ数丈になるところから凌霄という」と説明しています。日本には平安時代に渡来したと考えられています。『本草和名』(918)に「紫葳 一名凌霄、和名乃宇世宇、末加也岐」とあり、『倭名類聚抄』(931-937)には「凌霄 本草に云う紫葳、末加夜木一云う農世宇、蘇敬注に云う一名凌霄」と和名があるところから、少なくとも9世紀には渡来していたのではと推測されています。「ノウセウ」、「ノセウ」は凌霄(リョウシヨウ)の音の訛ったものと言う説があります。加えて『医心方』(982-984)に「紫葳 和名乃宇世宇乃加奈良」とあり、下って『多識編』(1612)には「紫葳 乃宇世宇、今案ずるに乃宇世牟可豆良」とノウゼンカズラの原名が載っています。

落葉つる性木本で、気根(付着根)により他物によじ登り高さ10m以上に繁茂します。葉は対生し、奇数羽状複葉で小葉は5-9個、卵形または卵状披針形、粗鋸歯縁です。夏に円錐花序を頂生し、花柄は下垂、花冠は漏斗状で、先端が5裂し唇形、直径6cmの大型で鮮やかな濃いオレンジ色の花冠や7-9月と花期が長く次から次に咲くようすは園芸的価値も高く、庭の樹木に絡ませたり、棚仕立てにして鑑賞されています。雄ずいは4個で弓型に湾曲することから属名*Campsis*のギリシア語*kampsis*(湾曲する)の語源になりました。国内では稀にしか結実することはありません。繁殖は主に挿し木に依ります。同属種に北アメリカ東南部に分布するアメリカノウゼンカズラ(*C. radicans*)があり、同じく観賞用に植栽されます。ノウゼンカズラと非常によく似ていますが、花は新梢の先に4-12個集まった集散花序に咲き、花冠は長さ7-9cmと長く、径は小さい。

江戸時代初期の園芸書『花譜』(1694)に「凌霄花 其のつる長さ数尺のとき、木を得てよぢのほり、松の木に多くはははしむ。藤かづらのごとし。花黄赤色なり。夏秋花をひらく。花を鼻にあててかぐべからず。脳をやぶる。花上の露目に入れば、目くらくなる」と紹介されています。後半の花の毒性についての記載は、『本草綱目』(1590)に「花は脳を傷めるから鼻に近づけて香を聞いてはならぬ。花の露が目に入れば昏蒙する」とあるところからと思われそうですが、『名医別録』には「紫葳 毒無し」とあり、間違った迷信であることは確かですが、現在に至っても一般庭園では嫌う傾向があります。『本草綱目啓蒙』(1803)には詳しい説明がなされ、「人家に栽ゆ。山野にも自生あり。藤蔓繁茂し、木に纏ひ、高く登る。故に凌霄(空を凌ぐ)と言う。年久きものは蔓大にして紫藤(フジ*Wisteria floribunda*)の如し。多く木を枯らす。春、新葉を生じ、両対す。形ち紫藤葉の如にして粗き鋸歯あり、深緑色。六七月、一尺許の枝を出し、両対して花を開く。形牽牛(*Ipomoea nil*)花のごとし。本は筒子にして末は円瓣五出にして剪夏羅(*Diplomorpha sikokiana*)の花の如し。大さ一寸余り、内は赭黄色外は淡黄色、葉の色も同じ。後小莢を結ぶ。長さ二寸許にして扁じ。冬に至りて葉枯落つ」とあります。(村上守一 記)